東南アジア研究　35巻4号　1998年3月

生命の連なりを未来に
——北ビルマから中国雲南省と北タイにかけての民族間関係と民族・国家間関係と民族内関係をめぐって——

吉　田　敏　浩*

Maintaining the Link of Life into the Future: Relations between and within Ethnic Groups and between Ethnic Groups and the State in Northern Burma, Yunnan Province, China, and Northern Thailand

YOSHIDA Toshihiro*

The vast region of mauntains, plateaus and valleys extending across northern Thailand, Laos, Yunnan Province of China, northern Burma and northeastern India is home to many ethnic groups, including the Lahu, Lisu, Karen, Kachin, Shan, and Chin. These ethnic groups constitute a minority in several countries and are often suppressed by governments which an ethnic majority controls. As a result, they sometimes fight against these government's centralism and assimilation policies in order to protect their own ethnicity, identity, culture, language, and area. In Burma, conflict between the Burmese government and ethnic minorities seeking autonomy or independence has continued since 1948. This is a case of activity by ethnonationalists.

The ethnic groups have legends and myths about their origins and clans, their ancestral kingdoms and wars of ethnic resistance. Such legends and myths often become elements that encourage ethnonationalism.

While ethnonationalism has played major role in resistance struggles that required ethnic unity, it also sometimes disturb relations within an ethnic group. For example, in Burma, Kachin society was damaged by trouble that originated in an excess of ethnonationalism, which upset the balance of relations among different linguistic groups of Kachins.

I think that it is important to understand that relationships of coexistence of various lives in nature have a longer history than the State, nation or nationalism.

I　国境を越えて

初めてビルマの山岳地帯を訪れたのは，1977年の雨季8月である。タイ北西部の盆地にある国境の町メホンソン近郊の村から北へ，2,000メートルをこす山脈を越えて，ビルマ東北部，

* アジアプレス・インターナショナル；Asia Press International, 2-13-32-402, Kamiosaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-0021, Japan

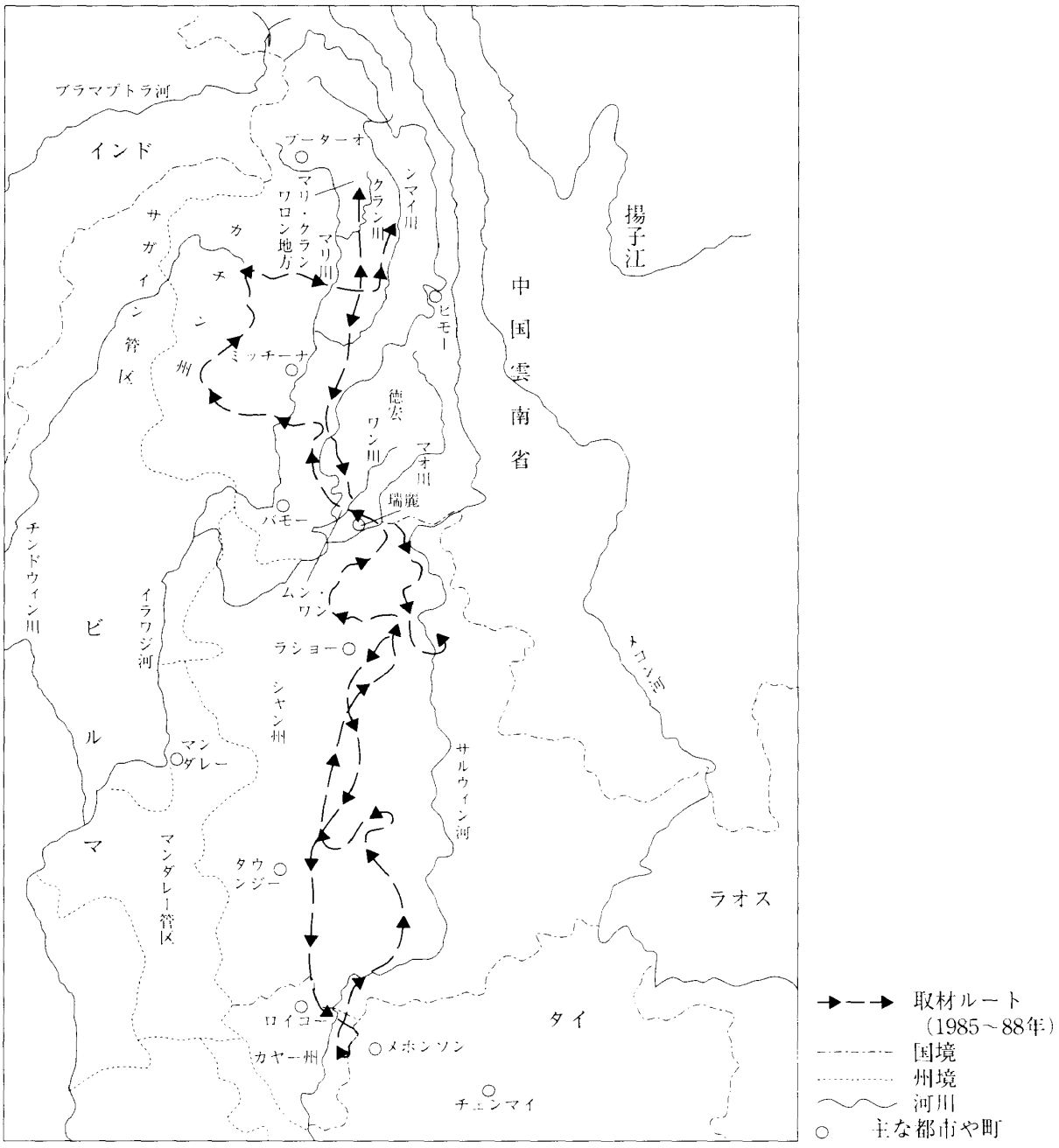

図1　北ビルマ要図

シャン州の南端に足を踏み入れた。ビルマで少数派の民族として，自治権を求め軍部独裁の政府と闘うパオ人(Pa-Oh)のゲリラ組織，パオ民族機構(P.N.O.)に同行したのだった。海外に出たのも，地つづきの国境線を越えたのも初めての経験だった。

タイ領内の最後の村から，雨が降りしきる密林の山を泥濘に足をとられながら登ること半日，草花が咲き乱れる台地の野原が目の前に開けた。やがて雨もあがり，夕方近く，台地が尽きる

あたりの丘と丘の間にさしかかった。そこが国境で，地図上では東西に国境線が走っているが，壁や鉄条網にさえぎられているわけでもなく，ただ草むらと木立が風にざわめき，雨を吸った赤土の山道があるだけだ。

わたしはどこか拍子抜けすると同時に，胸の内が風通しがよくなるのを覚えた。国境というものが人工的な制度上の線にすぎなくて，空も大地も森もそれと何ら関わりなくあるがままにつながっている事実を，この目で確かめられたからだろう。ここに来るまで，パスポートやビザや出入国管理や税関といった何重もの制度の扉を，否応なく通ってこざるをえなかった。その度に，国家という目に見えない「構築物」の重さ息苦しさを感じた。しかしいま，国家や国境よりも自然の方が古くからあり，いつかもし国家がなくなったとしても，自然は永くあるだろう，ということを肌で感じることによって，わだかまりも解けてゆくようだ。

そして，人間の世界もまた国境を越えてつながっている。パオ，シャン(Shan)，カレニ(Karenni)，カレン(Karen)，ラフー（ラフ Lahu)，リスー（リス Lisu)，アカ(Akha)といった，ビルマの東北部に住む諸民族はタイ北部の山地や盆地にも住み，国境をはさんだ同じ民族同士の往き来もある。このようにさまざまな民族が国境を越えて暮らしている現実は，両国の間にだけではなく，タイ，ラオス，中国雲南省，ビルマ，インド，バングラデシュにまたがる広大な山地と高原と盆地の全域にも見られる。

もともとかれらがいた土地にあとで国境線が引かれたためであるし，国境ができたあとも，焼畑に適する土地を求めて山から山へ移住し国境を越えてしまう人びとがいるからでもある。あるいは，革命や戦乱や時の政府による弾圧などによって，難民として国境を越え，移り住まざるをえない場合もある。

わたしはゲリラ兵士たちとゆっくり歩いて国境を越えた。地面にくっきりと足跡がきざまれる。雲海の上にシャン州の山なみがつづき，その果てはかすんでいた。

II　山の道が結ぶ世界

このとき，国境から下った谷間にあるゲリラ部隊のキャンプと，焼畑と水田をいとなむパオ人の村を訪ねた。それ以来，シャン州を度たび訪れ，自然のリズムと天地の恵みによって生きる人びとの姿にひかれるようになった。そこには，遠い祖先の時代につながるような，なつかしいともいえる時間と空間が息づいていた。

そもそも，なぜタイ北部からビルマにかけての地域に関心を持ったかといえば，『ヤポネシア序説』[島尾 1977] という本のなかで，文芸評論家，奥野健男の次のような言葉にふれたからだ。彼はこんな仮説を述べている。

古代，揚子江以南の地で暮らしていた人びとは，北から来た漢民族に押しやられ，西へ南へ雲貴高原やインドシナ半島方面に移った。そのなかには，タイ族など平地の水田稲作民と山地の照葉樹林帯で焼畑をするミャオ族やヤオ族などがいて，モザイク状になっていた。かれらの一部は九州へ渡ってきて稲作をもたらしたのではないか……。

それから，タイで会った山地民族についてこう語っている［同上書:218-219］。

「タイで会ったミャオやヤオのひとたちは面白いんですよ。自分の領土，王国があって，それは雲の上だという。要するに800メートルとか，1,000メートルから上だけが自分の王国で，それはもう中国から……ラオスなんて特に多いんですけど，ベトナムとかタイとかビルマとか，それからもっとヒマラヤ山脈のずうっとネパール，ブータンからカトマンズの方までそういう人たちが山の道をつかって連絡交流している。下界には国境線があるが，彼らにはない。」

「で，みんな部族が中心なんですけどね，そして少数の部落ごとに別れ住み，焼畑を追って移動している。だけどみんな同族意識があって，……中略……，山の道でみんな往復していて，山の1,000メートルから上は自分たちの領地だといって，そこにひとつの架空の王国があって，やっぱり救済のメシアみたいなものを望んでいることになる。」

「ぼくは日本国というようなナショナルなものに対しもっと東アジア全体のインターナショナルな広がりが，発想の転換というか，展望が開けかかったような感じをもった。国家の先に部族があり，部族同士の連帯があるのじゃないか。それが東南アジアを中心とするヤポネシアの発想だと。」

「ヤポネシア」とは，長年，奄美大島に住んだ作家の島尾敏雄が提唱した言葉であり，概念である。「もうひとつの日本」をイメージさせる「ヤポネシア」は，日本列島をポリネシアやミクロネシアと同じような太平洋の島々の一群としてとらえ，この列島を日本国家という一元的な枠組みから多元的な世界の広がりへと解き放つために発想された。

奥野の言葉は，東南アジアの山地民の国境を越えたつながりを「ヤポネシア」と結びつけて，「ヤポネシア」のイメージをより広がりのある現実的なものにしようとしている。わたしは視界があざやかに開けて，遠くまで見渡せるみたいに感じた。国家の枠組みにとらわれぬ山の民が，国境を越えてどこまでもつづく山の道を自由に往き来しているとは，なんて素晴らしいことだろう。山の道や高原の道が，木の葉を陽に透かすと見える葉脈のように，アジア大陸を縦横に延びているらしいのだ。

Ⅲ　雲の上の国

それから，タイ北部の山地民族について調べた。ラフー，アカ，リスー，カレン，メオ（Meo／モン Hmong），ヤオ（Yao／ミエン Mien），などの諸民族が五十数万人いるといわれ，小さな集落の竹の家に住み，焼畑をいとなんでいる。弓や先込め銃で狩りもするらしい。かれらはビルマ，ラオス，中国雲南省の方から山地を転々としながら移り住んできた。いまも同族の多くがそれらの国々にいる。キリスト教徒になった人たちもいるが，伝統的なアニミズムも根強く残っているという。

『東南アジアの少数民族』［岩田 1971:35-36］に，こんな文章があった。

> 私はかつて北部ラオスのヤオ族の村をたずねたさいに，村人から聞いたことがある。ヤオ族にはヤオ族の国があり，ヤオ族の「王」がいるのだということである。ヤオ族は海抜およそ1,000メートルの山地に点々と村づくりしているのであるから，かれらの国土はこれらの峰々をつらねたところ，いわば雲の上に浮かぶ国土である。雲の下にはカー族が住み，ラオ族の国土がひろがっている。雲の上の国家というのも奇妙なものであるが，それでも，ヤオ族の村人はヤオ国の存在を主張し，ヤオ族の「王」が雲南省の九江のほとりにいるというのである。
>
> じっさい，ヤオ族の「王」と称する人物がいるし，ヤオ族と近縁のメオ族にも「王」がいるという。これらの「王」は日常はその支配下にある諸部落にたいしてとりたてて働きかけることはない。税金をとりたてるわけでもなく，徭役労働を徴募するわけでもない。しかし，ときとして村々に回状をまわし，ヤオ族……あるいはメオ族……としての心構えを説き，生活規範の指導をすることがある。「王」は部族のメンバーにとって文化的・倫理的なリーダーなのである。伝統的な権威の保持者なのである。

ヤオ人は各国に別れわかれに住んでいても，同じ民族だという帰属意識，アイデンティティーを失っていないようだ。

わたしはますます山地に住む民族の世界への関心を深めた。雲の上，雲海の上に，自らの「王国」の存在を信じる人びとは，いったいどんな世界像を心に描くのだろうか。

かれらも，雲の下の平地には多数派の民族を中心とする国家があり，国家権力は軍隊や警察や役人を通じて支配の触手を山地にも伸ばしていることを知っているはずだ。国民意識を抱かず，国籍も住民登録証のようなものも持たない山地民も，地図の上では近代国民国家の一部として囲いこまれているのである。

たとえばタイでは，ベトナム戦争終結からまだ二年後の当時，インドシナ三国で起きた共産

主義革命の波が自国にまでおよぶのを恐れる政府が，北部の山岳地帯でタイ共産党ゲリラの鎮圧に力を入れていた。山地民族の組織化をはかる共産党に対し，政府は山地民族の定住・同化政策を進め，共産勢力の浸透を防ごうとしていた。また，タイ軍や国境警備警察に協力する，中国国民党残党軍の傭兵には，ラフーやワ(Wa)など山地民の若者も雇われていた。山の民も現代史の荒波にもまれることを余儀なくされていたのだ。

その渦中で，かれらの共同体はどのようにして伝統文化や言語を守り，祖先から受け継いできた生命の連なりを未来の世代につなげてゆくか，という問題に直面していた。

Ⅳ　伝承が支える民族のまとまり

そうしたときに，かれらの心を支えるのが，雲海の上は自分たちの世界であり，国境と国家の枠組みにとらわれることなく，同族のつながりを保っているという思いなのかもしれない。その思いの裏には，長年つちかってきた独自の歴史と伝承があるようだ。

かつて揚子江以南の肥沃な平野で稲作をいとなみ栄えていたらしいヤオ人（瑶族）は，歴代の中国の王朝による圧迫や戦乱をのがれて，中国南部の山地に引きこもらざるをえなくなったという。王朝の統治機構に対して度たび蜂起して抵抗もしたが，鎮圧され，さらに王朝の勢力のおよばない山奥に移った。そして安住の地を求めて，東南アジアまで山づたいに移住する人たちもいた。

一方で，漢民族の文化から強い影響も受けた。漢字を使うようになり，道教を取り入れて固有のシャーマニズムと祖先崇拝を洗練させた。中国の皇帝から，山々で自由に耕作する権利と免役・免租の特権を保証する「評皇券牒」という特許状を与えられたこともある。それには，ヤオ民族の起源神話と中国南部にひろがり住むようになった経緯が記され，自分たちの歴史と伝承を知るための古文書ともなっている。タイ北部のヤオ人の村でも，「評皇券牒」がたいせつに保存されているという。

『東南アジアの少数民族』[岩田 1971:230] によれば，ヤオ人の社会は，村々に長がいて，数カ村ごとに大首長がいて，その上に最高首長がいて，カリスマ的権威をふるっていたという。伝統文化に支えられた最高首長には，民族全体の支持が寄せられていたようだ。

その最高首長が「王」と呼ばれ，ヤオ人のまとまりの象徴となり，最高首長を中心に山の道で結ばれる村落共同体のつらなりが，かれらの心のなかで「雲の上の国」としてイメージされるのであろう。平地の多数派の民族や国家との軋轢があればあるほど，「雲の上の国」は心のよりどころになるのかもしれない。

ヤオ人の「王」に似た存在は，ラフー人（拉祜族）の間にも見られる。

その王に似た存在は，プー・チャ・ウー(Cha Euh)という人物でシャン州に住み，ラフーの

アニミズムの宗教的リーダーである。いまも存命かどうかわからないが，1978年の3月に一度だけ，タイから国境を越えてすぐのロェイ・ラン村で姿を見かけた。

大柄な色白の中年男性で，黒い民族衣装をまとい，しぐさや口調もゆったりとしていた。キリスト教に改宗していないラフーの人びとからは，生き神さまとして敬われ，旧暦の新年の祭りのとき，遠くは中国からも訪ねてくるラフー人たちもいるという。

木と竹でできた高床式の家の前には，竹竿に白布をつけた幟がはためき，頂部を擬宝珠みたいに彫刻した柱が立てられていた。屋内には祭壇があり，プー・チャ・ウー氏は天地の神々を祀り，焼畑の豊作や子孫繁栄などを祈願する。病気などの悩み事を持つ人のためには，祈祷してあげたりする。

彼は宗教的リーダーであると同時に，祭政一致のカリスマ的な政治指導者でもあり，ビルマ政府の中央集権支配に抵抗するラフー人のゲリラ組織をひきいてもいた。また，身近なところでは，村人同士の争い事の調停などもおこなう。彼はビルマにおけるラフー民族のまとまりの象徴となり，タイと中国に住む同族にも影響をおよぼしていた。その背後にはやはり，「雲の上の国」のイメージが生きているのではなかろうか。

ラフー人の原郷は中国の雲南で，ヤオ人と同じように中国の王朝の圧迫を受けて，160年くらい前からビルマに移住しはじめ，タイには100年ほど前にやって来たらしい。「天に一番近くに住む山の人々」[小松 1997] によれば，かつて雲南の盆地にあったラフー人の王国はムメミメといい，1800年代に清王朝の軍隊によって滅ぼされたという。

かつてムメミメがあったのは，現在の雲南省西南部，拉祜族の自治県となっている瀾滄県の県都，瀾滄市から北に行った双江市の盆地の平野部らしい。ムメミメは森と川があり，果物も動物も魚も豊富で，水田の稲もたわわに実る肥沃な国だったそうだ。

ラフーの人びとは鉄砲を持つ清軍に対し毒矢だけを武器に勇敢に戦ったが，結局，敵の奇略に敗れたという。男たちが仕事や戦いに出ている間に，清軍は商人に変装して来て美しい笛を吹き，笛を欲しがる女たちに，家にある矢尻との交換を持ちかけ，矢尻をだましとっていったのである。かくて，男たちは葉っぱが落ちるように死んでいった。森にかくれて闘った英雄は，捕まり殺されたあと，見せしめのために内臓をえぐりとられた。

以後，ラフー民族の山地への流浪の歴史が始まった。人口も減った。

ラフー人の子供たちは，必ずと言っていいほど祖父母から，かつての豊かだったムメミメという国の伝説を聞かされながら育つという。

V　抵抗と敗亡の伝説

これと似たような話は，北ビルマと中国雲南省とインド東北部にまたがって住むカチン人

(Kachin)の間にも伝わっている。

言い伝えによれば，カチン人の祖先たちは大むかし，揚子江上流の北方から民族移動してくる途中，中国人（漢民族）と隣り合う土地に住みついたという。やがて，祖先たちが死者を埋葬するとき，溝でかこんだ大きな円い墓をつくり，広い土地を使うということをきっかけに，中国人との間に戦争が起きた。祖先たちは勇敢に戦ったが，多勢に無勢で，とうとう退却するはめになった。逃れのがれていくと，大きな河に行きあたったので，竹筏をつくって向う岸に渡った。その直後，追手がやってきた。

「これから先，おれたちは東岸の地には出ていかない。だから，おまえたちもこっちの西岸の地には渡ってくるな。この河を境にしようじゃないか」と，祖先たちは叫んだ。

中国人もそれに同意して，追ってくるのをやめた。カチン人にとっては，この河があったればこそ，無事生きのびることができたのである。

これにちなんで，サック・クルン河という名前がつけられた。サックとはいのち，クルンは生きる。「いのち生きる河」という意味だ。チベット高原に端を発し，雲南省の西端とビルマ東部をつらぬいてインド洋にそそぐ，大河サルウィンこそこの河なのである。

サルウィン河が山なみの狭間に峡谷をきざむシャン州北部の山村で，1988年の2月に，ビルマ政府に対し自治権確立を求めて戦うカチン独立軍(K.I.A.)ゲリラのンブイ・ガム大尉から，夜，焚き火にあたりながらこんな伝説を聞いた。

> 大むかし，ウンポン（Wunpawng，カチン人の自称）の祖先たちの土地に，中国人の大軍が攻めてきて，戦争になった。祖先たちは険しい山の上に立てこもった。山刀と槍をふるい，トリカブトの毒矢を弩で射た。籐で編んだ兜と鎧に漆を幾重にもぬって固め，敵の刀や槍や矢をはねかえした。兵力は少なかったが，果敢に戦い，敵をさんざん苦しめた。
>
> しかし，攻めあぐねた中国側は奸計をめぐらした。ある夜，山のまわりにひそかに油をまき，疲れた祖先たちが寝静まっているすきに火を放った。突然の火攻めによって多くの死者が出，敗れた。同時に，獣の皮に書かれた独自のウンポン文字やいろんな道具や装飾品も失ってしまった。それ以来，ウンポン人は山奥にしりぞき，焼畑を開き，人口も少なくて，文字も持たない生活を送るようになってしまった……。
>
> いまとなっては大むかしの話だけど，敗れた先祖はさぞかし無念だったろうな。子供の頃，大人たちからこの話を聞かされて，くやしくて仕方なかった覚えがあるよ……。

語り終えた大尉は，じっと焚き火の炎に目を向けたままだった。小屋の外，山をおおう闇は深かった。火攻めにあってもだえ倒れる黒い影たちが，心のなかに浮かんだ。耳を澄ませれば，敗れ去ったウンポンの祖先たちの呻き声も聞こえてくるような気がした。

Ⅵ　カチン人と漢族・中国の関わり

カチン人には，かれらの祖先がマジョェイ・シンラー・ボム（Majoi Shingra Bum，自然に平らな山，あるいは共通の根源の自然の山）と呼ばれる，世界の中央にそびえ立つという山から南に下ってきて，いまのカチン州の山岳地帯に住みついた，という伝承がある。マジョェイ・シンラー山にはいくつもの大河の水源があるといわれ，それらの大河とは揚子江（金沙江），メコン河（瀾滄江），サルウィン河（怒江），イラワジ河，ブラマプトラ河なのだと，カチンの人びとは言う。神話のことでもあり，正確な位置はわからないが，先にあげた大河の源があるという点から，いまのチベット自治区から青海省にかけての高地（青蔵高原）のどこかではないかと考えられる。

伝承によれば，カチン人の祖先たちはマジョェイ・シンラー山から，揚子江，メコン，サルウィン，イラワジといった四つの大河の源流地帯を通り，温かい気候と野生の動植物が豊富で肥沃な土地を求めて移り住んできたらしい。途中，食べられる野生植物を採集し，狩りをし，焼畑を開きながら，何世代もかけて移動したという。

この民族移動の旅をカチン語で，ギンルー・ギンサー(Ginru Ginsa)と呼ぶ。その途上で漢族（中国人）の軍隊との戦いが起きて，それが語り伝えられたのだろうか。

一方，中国の史書にカチン人らしき民族の名が散見される。「西南夷」と総称された中国西南部の諸族のうち，「濮」という字をあてられた人びとがそうではないかといわれる。「夷」とは，漢族から見て辺境に住み，不当にも野蛮と見なされた異民族を意味する文字である。『高地ビルマの政治体系』［リーチ 1987:270］に次のような記述がある。

> 350年から1000年にいたるさまざまな時期に出版された多数の古い中国の書物には，「野生的で手に負えない濮 b'uok 諸族」への言及が見られる。彼らの住地は明らかに永昌西方の山々であり，……中略……。これはカチン山地住民のことらしく，その言語と文化は変化したかもしれないが，濮という部族名は一貫して用いられた。

『景頗族』［龚庆进 1988］によれば，中国で景頗族（チンポー）と呼ばれるカチン人の祖先が古代にいたという土地マジョェイ・シンラー山は，青蔵高原のどこかであり，その一帯には中国の史書に「氐」と「羌」という名で登場する人びとが古くから住んでいたという。それらのなかには，今日のチベット人（蔵族）やイ（彝）語系諸民族の祖先もふくまれていたらしい。景頗族（カチン人）は言語的にも地理的にも，「氐」「羌」の人びととの関係が密接であり，おそらく「氐」「羌」の諸族の集団から分かれていったのだろうという。チベット人（蔵族）もイ人（彝族）もチャン人（羌族）もカチン人も言語学的には，同じチベット・ビルマ語族に属

している。

ともかく，カチン人は中国の西南の端にも住みついたことで，歴代の中国王朝や中華民国や中華人民共和国との関わりを避けられなかった。中華人民共和国成立以前は，漢族から「野人」や「山頭」といった侮蔑的な名前で呼ばれた。

かれらは，サルウィン河の西側にあたる，現在は雲南省西南部の徳宏傣族景頗族自治州になっている土地に，14，15世紀頃にビルマのイラワジ河上流部（いまのカチン州）から移り住んできたらしい。その共同体には，漢族から「山官」と呼ばれた世襲制の首長がいたが，タイ族出身の土侯による間接的な支配下にもあった。

そして後年，中国現代史の荒波をまともに受けることになった。1949年の中華人民共和国成立後，50年代後半からは中国共産党の政策によって農業集団化を強いられた。伝統的な生業である焼畑農業から水田稲作への転換も進められた。60年代後半の文化大革命の時期には，伝統的な習俗や文化や宗教への弾圧をこうむった。

1978年末以降は，中国共産党の政策が変わり，伝統的なアニミズムの宗教儀礼も再開されるようになったというが，共産党の路線次第では，いつまた厳しい弾圧がおこなわれないともかぎらない。圧倒的な多数派の漢族が実権を握る中国という国家が，「少数民族」として位置づけられた人びとの上に重くのしかかっているような状態は，本質的には相変わらずだ。そんな状況のなかで，かれらもまた，生命の連なりをどう未来の世代につなげてゆくかという問題に直面している。

Ⅶ　文革の荒波と越境したカチン青年

文化大革命の荒波に翻弄されて，その人生行路が大きく変わってしまった幾人かのカチン人に会ったことがある。1985年３月から88年10月まで，タイから歩いてビルマ北部のカチン州とシャン州を旅し，取材したときのことだ。

そのひとりは，ラ・ノンさんというカチン独立軍の兵士で，背も高く，膂力もあるがっしりした体つきの30過ぎの男性である。タイ・ビルマ国境からわたしが同行した，カチン独立軍部隊の一員だった。彼はどちらかといえば無口な方だが，たまに酒が入ったりすると，わたしにも日本のことについて話をせがんだりして人なつこいところがあった。

85年の10月末，わたしたちはシャン州の山野を行軍したあとに，やっとカチン州にたどり着いていた。そこは，雲南省徳宏地区との国境地帯で，カチン人とシャン人と中国人（漢族）などが住んでいる。田んぼや焼畑では稲が実り，稲刈りがおこなわれていた。ある村に泊まっていたとき，ラ・ノンさんは，瓶に入った納豆や漬物の匂いが漂う土間で，戸口からさしこむ明かりを頼りに繕い物をしていた。何か考えこんでいる風だった。「ラ・ノンは雲南の村にいる

かみさんの顔が見たいんだけど，もう何年も会ってないから，自分のことを忘れてしまったんじゃないかと心配なんだよなあ」。

ズケズケものを言うのが癖の，小柄な兵士ロー・トンさんの冗談めかした言葉に，「そんなことは気にしちゃいないよ。ただ，今回ちょっと帰れたとしても，みやげも何もないのが心苦しいんだ。遠くタイまで行ってきたのにな。そのうち除隊したら，国境交易の商売をやるか，思いきってヒスイ掘りにでもいくしかないか……」と，ラ・ノンさんはきまじめに返答し，途中からはひとり言のようにつぶやいた。わたしは，シャン高原でとぎれとぎれに彼から聞いた話を思い出した。

彼は，中国雲南省徳宏傣族景頗族自治州の，近年ビルマとの国境交易で栄えだした瑞麗県，マオ川（シュウェリ川）流域平野のある村に生まれた。カチン人のなかの言語集団のひとつアヅィーの村で，戸数50戸あまり，500～600人が住み，水田とサトウキビ畑と茶園をいとなんでいる。すぐ近くには中国人民解放軍の駐屯地があった。

1953年生まれで，子供の頃から田畑の手伝いをしながら，父母と年が離れた兄と妹と暮らしていた。母語はアヅィー語だが，同じカチンの「言語集団」であるジンポーやシャン人の村もあったので，それらの言葉も覚えた。小学校に5年間通ったので中国語も話せ，漢字もいまは忘れたが少しならわかる。ビルマ語はほとんど知らない。

国境のマオ川対岸のビルマ領内にも同族が住み，ビルマ政府に対して独立をめざすゲリラが戦っていることは，大人たちの話で知っていた。同じカチン人の国がもしかしたらできるかもしれない，そうしたら，いまは中国人の共産党の下で暮らさなければならなくても，いつかは同族とひとつの国に住めるかもしれない，もっとも，村が戦争にまきこまれるのは御免こうむりたいが……，と村人たちは関心と共感と不安のいりまじった気持ちで，国境の向こうのできごとを眺めていたという。

しかし，まさか自分がそのゲリラ，中国領のカチン人の間でもカチン語で「シャンロット」（Shanglawt，独立解放）と呼ばれるカチン独立軍に加わろうとは，夢にも思っていなかった。ところが，16歳になった年，一家の運命を激変させる事件が村を襲った。

1969年，3年前から中国の中央で始まっていた文化大革命の荒波が，雲南の辺境まで押しよせてきたのだ。熱い陽が乾いた大地を照らす4月頃，中国人民解放軍の7686部隊と名乗る軍人たち（公安関係だったと思われる）が，紅衛兵とともに村にやって来て，軍人の家族の身元調査をおこなった。

ラ・ノンさんの家も兄が入隊していたので，一族の出自，生産・生活状況，思想傾向，宗教などについてしつこく調べられた。彼の家は，祖父の代までグムチン・グムサー・ドゥー（Gumchying Gumsa Du，首長＝山官）だったので，旧封建勢力に属する反動分子の家系だと決めつけられてしまった。

実際は，1950年に雲南省で国民党を破り，辺境支配を確立した共産党主導の政治工作によって，53年，徳宏傣族景頗族自治区が成立し，それが56年に自治州になるとともに，伝統的な氏族首長制は解体されていった。それに続く土地改革を通じて，首長の土地領有権も廃止されていた。50年代半ばに始まった合作社方式による農業集団化，さらに58年からの「大躍進」路線による人民公社化政策を通じて，村は生産隊という単位に組織され，水田や水牛や牛などは共有化されていた。ただ，自家菜園や豚や鶏などは私有が認められていた。

にもかかわらず，文革派は，「少数民族」社会でも，新たな階級闘争の徹底が必要だと叫んだ。かれらの多くは二十代，十代の漢族の若者で，『毛沢東語録』を振りかざし，狂信的な態度をとった。彼の家の自家菜園や家畜は接収され，銀細工をした刀や女性の民族衣装も没収された。父親は富農反動分子を糾弾する集会で後ろ手に縛られ，封建首長の家柄を利して人民を搾取しているなどと批判され，罵声とともにつるし上げられた。

父親は，「首長といっても，他の村人と比べて広大な田畑を所有し小作人を使っていたわけでなく，自分たちも野良仕事をしていた。むかしはしきたりとして，村人からの年貢や労働奉仕を受けていたが，その分，祭りの宴を催すなどして見合ったものを返してもいた。第一，それは父親の代までで，自分たちはもう10年以上前から普通の村人として暮らしている」と訴えたが，耳を貸してもらえなかった。とうとう，父親は心労とショックで脳溢血を起こし，死んでしまった。

文革の嵐は伝統文化や宗教も排斥した。アニミズムの儀礼や祭りもできなくなった。彼の家族をはじめ村にはキリスト教徒が多かったが，教会での日曜礼拝もできなくなった。父を失い，村でも息苦しくて暮しづらくなった一家，母とラ・ノンさんと妹は難民として，ビルマのシャン州北部にいる同族の縁者を頼って，1970年，ひそかに国境のマオ川を渡った。身を寄せた先では焼畑や水田を手伝いながら暮らした。

やがて，カチン独立軍の将兵や独立機構の活動家らとも知り合った。かれらの話を聞き，ビルマ領に住むカチン人のあり方と内戦と解放区の現実を知るにつれて，ビルマや中国といった，自分たちの民族から見てどうしても母国とはいえない国家の政府の力によって，自分たちの伝統にそくした暮らしぶりが変えられ，人生の運命が左右されてしまうことに我慢がならなくなった。そして1977年，カチン独立軍に加わった。

「とにかく，自分たちが住んでいる土地での暮らし方は，自分たちで決めたい。遠いところにいる中国共産党やビルマ政府に，これ以上好き勝手にされて，俺の，みんなの，人生をめちゃくちゃにかきまぜられるのはもうごめんだ，がまんならない，と思ったし，いまも思ってるんだよ。かといって，むかしの首長の時代にもどろうとは考えてない。そうじゃなくて，村のみんなでなんとか話し合って決めていくのがいい。」

手さぐりするようにしてやっと語られる言葉を胸に，彼はゲリラ生活を続けてきた。

いまは中国領のふるさとの村に帰って住む妻と背が急に伸びてきたという十代半ばの息子が待つ家まで，ここからけっして遠くはないという事実が，危険な行軍を果してほっとしたのもつかのま，彼の心を再びかき乱しているようであった。

Ⅷ　国境による民族と地域の分断

このときわたしたちがいた地方は，カチン語でンション川，シャン語でワン川，中国語で隴川と呼ぶ川の流域でシャン人が多く住む河谷平野であった。シャンとはビルマ語による名称で，自称はタイ(Tai)。タイ系民族のなかの一グループとして，タイ・ヌー(Tai Nu)と称している。中国語では傣族という。ここでは便宜上，シャン人とだけ記す。

かれらがいつ頃から住んでいるのか正確にはわからない。雲南に7世紀半ば，南詔王国が成立し，この国を構成する一民族であったタイ系民族が，西へ居住地域をひろげる過程で住みついたのではないかと思われる。南にほど近いマオ川流域に栄えたシャン人のムン・マオ王国の影響下に，ムン・ワン土侯国がかつてここにあった。

平野には水田をいとなむシャン人が，それをとりまく山地には主に焼畑をするカチン人が住んでいた。カチン人の方が人口は少なく，農業生産力も低かったが，勇猛な山地民として武力では勝っていたらしい。よその平野や盆地への交通・交易路にあたる峠を押さえていたし，不作の年はシャン人の村から米を奪ったりもした。カチンの氏族首長はシャンの土侯の権威に服し，火薬などの貢ぎ物を納めてはいたものの，シャンの村人に対しては優位に立っており，毎年，米の年貢を受け取っていたという。それぞれ，平野と山地に生活領域を持ち，住み分けていたのであろう。

このようにひとつのまとまりを持ったワン川流域の地域を引き裂くように，国境線が引かれたのは19世紀末からである。1886年にビルマを植民地化したイギリスはやがて，清王朝の治世下にあった中国の西南部にも勢力を拡張しようという野望を抱いた。ワン川流域へも密偵や軍隊を送りこみ，地元住民と衝突した。

ムン・ワンをはじめとするシャン人の土侯国が，中国の王朝の宗主権を認めていたこともあり，問題はイギリスと清朝政府の間で処理されてゆく。国境画定に関する協定も結ばれはしたが，イギリスは領土拡張政策を捨てず，侵犯行為をくりかえし，帰属があいまいな土地を占領するなどした。これは，中華民国の時代になっても続いた。第二次大戦後，1948年にビルマ連邦が独立，その翌年に中華人民共和国が成立し，1960年，中国・ビルマ国境協定の調印によって，国境は現在の線に落ち着いた。

結局，国境は古くから住んでいた同じ民族を分断した。地元の意向をかえりみることなく，国家間で決められた不自然な国境線は，その両側に分かれて住むことを強いられた人びとの運

命を，歴史の流れのなかで左右し，翻弄することにもなった。ビルマ領内では，政府の抑圧に抗して銃をとる者があらわれた。村人はいやおうなく内戦にまきこまれた。中国側では共産主義化の波を受け，文化大革命のときは伝統文化や宗教も弾圧された。ビルマ側に亡命したシャン人の仏教僧侶たちもいる。

河谷平野には数キロおきに建つコンクリートの標識以外，国境を思わせるものは何もない。国境の両側では，同じワン川の水を引いた田で，同じ民族が稲を育てて食べている。ところが，不可視の境界線を境にして，時計上の時間に差があり，法律や通貨や度量衡も別々で，国家が公用語とする言語や文字も異なる。当然，社会情勢も違ってくる。村は隣り合っているのに，それぞれ別の遠く離れた首都に中心を置く，国家権力に引っ張られている。国境をはさんで，両国の出入国管理局や税関や警察や軍隊や学校といった国家の出先機関が，相似形で機能し，「辺境」の領土と住民を掌握している。

ワン川流域の山や谷や野に降った雨が，当然ワン川にそそぐように，本来，この地域の人も物事も同じひとつの歴史の流れにふくまれてゆくはずである。ところが，国境はまるで分水嶺みたいな役割をしている。隣り合う人や物事は離ればなれになり，それぞれ違う国家の歴史の遠い本流へと押し流されてしまう。この地の風土も人びとの暮らしもひとつづきであったのが，ビルマでイギリスの植民地支配が始まった時代から，外部の力によって揺るがされ，引き裂かれたのである。

Ⅸ　カチン人のビルマ国家への抵抗

カチン人とビルマ連邦という国家の関わりについてふれてみたい。

カチン人とビルマ人の本格的な関わりは16世紀頃に始まるようだ。イラワジ河の流域平原に覇を唱えたビルマ人の王国が，カチン州の平地にあったシャン人の土侯国を攻め，ビルマ王の宗主権を認めさせたことがきっかけだった。カチン人の首長たちの一部が，シャンの土侯に対してもしていたように，一族郎党を連れてビルマ王のもとで傭兵になったりした。しかし，カチンの村々にビルマ王国の直接支配がおよんだわけではなかった。

その後，1886年にビルマを植民地化したイギリスはカチン州へも侵入した。カチン人は抵抗したが，1914年頃までに抑えこまれた。イギリスはカチン首長の地位と権威を認める懐柔策をとり，カチン州はシャン州と同じく辺境地帯としてビルマ本土とは別の行政系統下に置かれた。欧米の宣教師による布教活動で，アニミズムからキリスト教への改宗が進んだ。現在，ビルマにいるカチン人の9割近くがキリスト教徒だといわれる。

イギリスはビルマ人を抑えるために，カチン人やカレン人に植民地軍に入ることを奨励した。第二次大戦中も，カチン人は連合軍側に協力的で，カチン部隊が編成され，日本軍とも戦った。

日本軍がアウン・サン将軍ひきいる反英独立派のビルマ独立義勇軍を支援していたことも，反ビルマ意識の強いカチン人などを連合軍側につかせる要因になった。

戦後，ビルマ人の間では独立運動が盛りあがった。当時，カチン社会で政治力を持っていたのは首長たちだった。かれらはアウン・サン将軍の説得に応じて，1947年，自治権を保証されることを条件にビルマ連邦への参加を決め，パンロン協定に調印した。

1948年，ビルマ連邦は独立したが，カレン人，カレニ人，モン人(Mon)などはあくまで自らの独立をめざして武力闘争に入り，内戦が始まった。

翌年の2月，ビルマ政府軍第1カチン・ライフル大隊所属のノー・セン大尉は配下の部隊を連れて，カレン人たちの戦いに呼応して武装蜂起した。カチン人の独立をめざしたのだ。かれらはカチン青年に呼びかけて，ポンヨン民族防衛軍(P.N.D.F.)を結成した。ポンヨンとは，神話に出てくるカチン人の始祖の名に由来する言葉で，カチン民族を意味する。しかし，ビルマ政府側についた首長や政治家に敵対されたため，首長に影響された住民からの協力を得られず，さらにビルマ軍に攻撃されて，部隊は四散した。ノー・センは部下たちと1950年，中国に亡命した。

その後，カチン州では，首長たちを中心に複数の政党が活動した。しかし，憲法で保証された自治権も限られたものであり，中央の連邦政府の権力がより強く，自治権はないがしろにされていった。当然，連邦政府の政権をになうビルマ人中心の政党，反ファシスト人民自由連盟(A.F.P.F.L.)の州政界への影響力が強かった。

1956年と57年，連邦政府は本来カチン州に属するウディ，ウガ，ライサイ地方をサガイン管区に編入し，1960年にはピモー，ゴーラン，カンパン地方を中国に割譲した。どちらも住民や州政府の反対を押しきっておこなわれたので，連邦政府への不満は高まった。1960年には，仏教を国教化しようとするウー・ヌ政権に対して，キリスト教徒の多いカチン人などは反対活動をくりひろげた。しかし，翌年，憲法は改正されて仏教国教化（後にとりやめ）は強行されたのである。

ビルマ連邦政府の中央集権支配が強まることに，カチン青年の多くは危機感をつのらせ，50年代後半から，教師や学生を中心に政治・文化運動が盛りあがった。それは次第に独立をめざす民族運動の色彩を強めた。パロン・ゾー・センとパロン・ゾー・トゥーの兄弟，マラン・ブラン・セン，マリズップ・ゾー・マイらが中心となり，大学生，高校生，政府軍内のカチン人兵士や州政府のカチン人公務員，教師などとひそかに連絡をとって同志をつのった。1961年2月，カチン独立機構(K.I.O.)が発足し，同時にその軍事部門であるカチン独立軍も創設され，3月に武力闘争を開始した。町や村の，カチン人青壮年層から多くの参加者があった。

1962年3月，ネ・ウィン将軍によるクーデターが起き，議会も憲法も廃止されて軍事政権ができた。独立あるいは自治権獲得をめざす「少数民族」ゲリラへの弾圧も強まった。1964年，

カチン独立機構は解放区において首長制度を住民の支持を得て廃止した。1969年には，民族自決，民主主義，民生向上の三本柱を運動の中心に据えることを決め，以後，闘争を続けた。

X　カチンの「言語集団」と氏族

カチン人がビルマと中国で，国家のなかの「少数民族」として位置づけられ，「多数民族」（ビルマ人と漢族）が実権を握る政府や政党から，伝統文化や宗教などへの弾圧を受けたり，居住地域の帰属に関する権利をないがしろにされたりしたことがあったのは事実である。ビルマでは，政府の中央集権支配に抵抗して，やはり生命の連なりを未来につなぐため，独立（その後，自治権の確立）をめざす闘争を起こした。それは，「少数民族」と，「多数民族」が実権を握る近代国家との関係のなかで生じた政治の現象である。

しかし一方で，「少数民族」として位置づけられた人びとのなかでも，政治の力学がはたらいて新たな問題が生じることもある。ビルマに住むカチン人の場合，民族内の「言語集団」間の関係にまつわる葛藤が起きた。

そのことにふれる前に，「言語集団」について説明しておきたい。カチン人のなかには，ジンポー(Jinghpaw)，マルー(Maru)，ラシー(Lashi)，アヅィー(Azi)，ヌン(Nung)，ラワン(Rawang)，リスー(Lisu)という7つの「言語集団」がある。それぞれ独自な言語や親族名称や子供の名づけ方や伝統的な衣裳などを持っているが，マルー語とラシー語とアヅィー語は近く，ヌン語とラワン語も似ている。

カチン州北部の大部分では，「言語集団」ごとに居住地域も分かれているが，カチン州の他の地域やシャン州北部では混じり合っている。ジンポー語が共通語になっていて，ふつうカチン語といえば，ジンポー語のことを指す。ジンポーの人びとがカチン州の中央部に住みつき，人口も多いからだと思われる。カチンとはビルマ語による呼称で，自称はウンポンというが，そのウンポンはジンポー語による名称である。

7つの「言語集団」が同じ民族の仲間だという意識を持っている理由として，まず，各「言語集団」の間を横断するようにしてある，十数グループの共通の父系氏族の網の目による結びつきがあげられる。氏族名は各言語で異なるが，ジンポー語による名称を介して，どれとどれが同じ氏族にあたるかがわかる。主な氏族に，マリップ(Marip)，ラトー(Lahtaw)，ラパイ(Lahpai)，ンコム(Nhkum)，マラン(Maran)，タンバオ(Tangbau)，カレン(Kareng)，ジャセン・ラバン(Jasen Labang)などがある。氏族はそのなかで多くの支族に，さらに苗字を持つ家族に枝分かれしている。

「言語集団」が違っても，お互い同じ氏族に属してカプー・カナオ（kahpu kanau，兄弟姉妹）の間柄にあたることで，あるいは別々の氏族でも先祖の代から姻戚関係（マユ・ダマ，Mayu

Da-ma）がいくつも交わっていることで，同胞なのだという思いを共有しているのである。異なる「言語集団」の男女が結婚するのも珍しいことではない。

また，各「言語集団」の始祖は，同じ父母から生まれた7人兄弟だったというカチン人の起源神話も語り伝えられている。父は人間だったが，母は太陽の神の娘だったという。神話では，その父というのは，太古，大洪水に生き残ってマジョェイ・シンラー山に漂着した兄妹の直系の子孫であり，各「言語集団」の祖先たちはマジョェイ・シンラー山から南下する移住の旅を共にしたと伝えられている。だから，元をたどれば7つの「言語集団」の根っこは同じだと，カチン人たちは理解しているのだ。

また，各「言語集団」の居住地域も隣り合ったり，混じり合ったりしているから，住民同士の交流も自ずと生まれてくる。焼畑農業と狩猟採集に支えられた暮らしぶりも同じようなものだし，神話やアニミズムの儀礼や慣習など文化面でも共通性が見られる。

こうして，「言語集団」という縦糸と氏族という横糸が編み合わされて，ウンポン（カチン）というゆるやかなアイデンティティーがつちかわれてきたのであろう。

ただ，ジンポー，マルー，ラシー，アヅィーは混じり合って住んだり，結婚し合う関係が積み重なって，氏族の網の目・絆による結びつきも密なものになっているが，ヌン，ラワン，リスーの場合は自分たち以外の「言語集団」との姻戚関係も多くなく，したがって氏族の網の目・絆による結びつきも密ではなくて，カチン人としての一体感，アイデンティティーが薄い。ラワンとリスーには，他の「言語集団」と共通の氏族もあるが，共通かどうか不明の氏族や，まったく別の独自のものらしい氏族もある。

ラワンの人びととリスーの人びとは，自分たちがカチン民族に属しているとは深く思っておらず，ふつうカチンといえばジンポーを指すと考える者が多い。たとえばリスーの人びとは，カチン州にいてジンポーやマルーなど他の「言語集団」と隣り合って暮らしている場合は，カチンとしての同胞意識を持っても，シャン州や中国やタイに住んでいる場合は，自分たちはまったく別の独自な民族であるという意識を持っている。共通の氏族の網の目もカチン州にいる場合にだけあてはまるようだ。中国では傈僳族と呼ばれている。

共通の氏族の網の目は，ラワンとリスーに関しては充分におよんでいない（ヌンの人びとについてもかなり同じことが言える）。だから，自分たちはそれぞれ別の民族だという思いが湧いてくるのも避けられない。

このような点が，これからふれる，ラワン，ヌンの人びととカチン独立機構・独立軍の間に起こった対立問題の根底に横たわっている。

XI 「言語集団」にまつわる葛藤

1986年の雨季8月，焼畑で稲やトウモロコシやウリなどの作物が茂り，村人は草とりに精を出している頃，カチン州北部の山岳地帯，イラワジ河の上流にあたるマリ川とその支流クラン川にはさまれた，マリ・クラン・ワロン地方の村々とカチン独立軍ゲリラの第7大隊本部のキャンプを訪ねた。

わたしはさらに北方のプーターオ地方にも行ってみたかったが，そこがビルマ政府の支配下にあることと現地の複雑な政治情勢が理由で実現できなかった。1970年頃までは，カチン独立軍第7大隊本部はプーターオ盆地のまわりを転々としていたが，ビルマ政府軍の攻勢により，71年頃チャイ川以南へ，75年頃からマリ・クラン・ワロン地方へと後退することを強いられたという。それにつれて，カチン独立機構が村人を組織できている解放区も北の方から失われていった。ビルマ政府軍が地域ごとに村人を自軍支配下の土地に強制移住させる作戦をとり，多くの村が消滅させられてしまったからだ。

このようにカチン独立軍第7大隊が後退していった背景には，プーターオ，クラン川源流，ンマイ川上流の各地における，カチン独立機構とラワンやヌンの人びととの対立問題がある。複雑な事情がからみ合っているが，かいつまんで説明すると次のようになる。

プーターオ地方にはシャン人（タイ・カムティー，Tai Hkmti）とカチン人が住んでいる。人口がより多いカチン人の側はジンポー，ラワン，リスーといった3つの「言語集団」に分けられる。ただし，ラワンとリスーの人びとは，自分たちがカチン人だとは深く思っておらず，ふつうカチンといえばジンポーを指すと考える者が多い。

1961年にできたカチン独立機構の指導者や中核となったメンバー，カチン独立軍のゲリラ将兵には，ジンポーが比較的多く，ほかにマルーとラシーとアヅィーがそれぞれ同じくらいいた。その理由としては，7つの「言語集団」中，ジンポーの人口が最も多いこと，ジンポー，マルー，ラシー，アヅィーが混住しているシャン州北部で組織が生まれ，やはり同じような状態のカチン州南東部へまず活動をひろめていった点があげられる。

そのせいか，組織の英語名ではカチンという言葉が使われたが，カチン語（共通語であるジンポー語）名では，「ジンポー・ムンダン・シャンロット・プン」（Jinghpaw Mungdan Shanglawt Hpung，ジンポー国独立機構）とされ，カチンのかわりにジンポーという言葉が用いられたのだった。

カチン独立軍の部隊が初めてカチン州北部にやって来たのは，1963年である。村人の間に支持をひろげて，志願兵をつのったときも，それにまず応じたのはジンポーが多く，次いでマルーやラシーの人たちが加わった。プーターオ盆地に入ったのは，1964年になってからで，このときが，プーターオ地方，クラン川源流地方，ンマイ川上流地方にだけ住むラワンやヌンの村人と，

カチン独立機構・軍の初めての本格的な接触だった。

「プーターオ地方で真っ先にゲリラを支持したのはジンポーの村人で，多くの若者が志願しました。リスーからの参加者は少なかったけれど，いい関係ができそうでした。リスーの人たちはカチン州の南東部やシャン州にも住んでいて，カチン独立軍のことはすでに知ってましたからね。問題が起きたのはラワンの人びととの間でした。もともと，ラワンとジンポー，ラワンとリスーの関係は，村の土地の境をめぐる争いや有力者同士の反目などによってよくはなかったんです。しかも，カチン民族の同胞という気持ちがどちらかといえば薄いラワンの人たちは，カチン民族独立軍はジンポー中心の組織であり，現にカチン語で“ジンポー国独立軍”と名乗っている，もし自分たちが参加してもジンポーの下に置かれるだけだろう，と考えたわけです。」

第7大隊長，ウラ・ノー大尉は重い口を開いて語った。

カチン独立軍に対するラワンの人びとの心理が微妙に揺れ動くなか，問題に火をつけたのは，相互不信にもとづくスパイ処刑事件だった。ビルマ政府に意を通じたり，政府にそそのかされたりした者がスパイをはたらいた場合と，ゲリラ側の誤解による人まちがいの場合の両方あったが，カチン独立軍の手でラワン住民が処刑される事件が相次いだ。それを機にラワンの人びとはビルマ政府側につき，反ゲリラの姿勢をかためていった。

自らの勢力がおよぶ地域において，否応なくひとつの政治権力・制度として機能してしまう反政府ゲリラ組織の，過剰反応とでもいうべき処刑策がボタンのかけちがいとなって，このような展開を招いたともいえる。

1964年末から65年5月頃にかけて，プーターオ，ンマイ川上流，クラン川源流の各地方で，カチン独立軍とラワン，ヌンの住民の間に武力衝突が起きた。双方合わせて数百人ともいう死傷者が出る深刻な事態になった。村人がビルマ軍に協力して弩や先込め銃や小銃でゲリラを殺したことへの報復に，カチン独立軍は敵対する村を焼き打ちしたり，捕えた男たちを処刑したりもした。両者の関係はすっかり険悪になってしまった。

以後，大半のラワンとヌンの人びとはずっとビルマ政府側についている。政府もカチン民族自決運動を分断するために，ラワンを利用している面がある。かれらを，プーターオに駐屯するビルマ政府軍第46大隊や警察や民兵組織などに数多く採用して優遇し，反ゲリラ活動に積極的に参加するよう仕向けている。

そして，政府側とラワンの指導層は，ラワンはジンポー中心のカチン民族に属してはおらず，言語的・文化的・歴史的に見ても別の独自の民族であり，むしろビルマ人と近しい関係があるとまで唱え，いまやその考えは住民の間にもひろまりつつあるという。それには，ビルマ国民としての国民意識の浸透も伴っているかもしれない。

「こうしてラワンとヌンの住民から支持を得れなかったことは，カチン独立機構にとって大

きな痛手でした。1969年に，“ジンポー国独立機構”というカチン語の組織名を，“ウンポン国独立機構”と改めたのは，そのことへの痛切な反省からなんですよ。」

ウンポンとは，カチン人の起源神話に語られる，７人兄弟として生まれた各「言語集団」の始祖の父親，つまり民族の始祖の名前に由来する。遠い祖先を同じくし，共通の氏族の絆で結ばれた民族という意味をふくんでいる。ともすれば，ジンポー中心主義になりがちだった傾向を正し，７つの「言語集団」全体に運動の輪をひろげるのが目的だった。

「言語集団」間の連帯を強めるために，政治・文化・歴史についての学習活動が，ゲリラや解放区住民の間でおこなわれた。それをもとに，ラワンやヌンの住民との関係修復も再三試みられた。しかし，衝突が残した傷は深く，もつれた糸は解きほぐせていない。

「当時，ビルマ軍と戦うために早く解放区をひろげなければという性急さが，われわれの側にあったのは確かです。それが誤解と不信を招いて，あんな結果になってしまいました。69年以来，誤っていた部分は改めてきましたよ。でも，ビルマ政府がラワンの一部有力者をたきつけて，ウンポンの血のつながりを分断しようとしたのが一番の原因なんです。そこから何もかもこじれてしまいました。しかし，カチン独立軍に参加するラワン青年だってわずかだけどいます。いまもプーターオ地方のラワン住民と関係をよくするために，接触の試みは続けてるんですよ。難しくて，時間のかかることなんでしょうが……。」

ウラ・ノー大尉は，目の落ちくぼんだ顔に苦渋の色を浮かべた。

20年ほど前に起きた流血の衝突は，深い亀裂をもたらした。その傷はいまだに癒されず，双方に苦悩の後遺症が残されている。そのかげでほくそ笑んでいるのは，ビルマ政府である。対立問題の事実を知ったわたしも，暗澹たる思いを抱かざるをえなかった。

XII　む す び

カチン人やパオ人やシャン人やラフー人など，ビルマとタイと中国に住み，国家のなかで「少数民族」として位置づけられる諸民族は，国境を越えて同族とのつながりを持っている。伝統文化，固有の言語，神話などをよりどころにして，祖先とのつながりを意識し，国家の枠組みを越えて民族のアイデンティティーを保ち，それぞれの国での国民意識は薄い。ビルマでのように，中央集権支配と同化政策への抵抗運動も起こしてきた。

かれらは，国家による国民統合（軍事力も伴う）という「中央」から「辺境」を支配しようとする力に対し，雲の上の国や過去の王国伝説や生き神や「言語集団」の起源神話や氏族の絆といった，民族のまとまりの象徴・イメージを活かして支配されまいとする。

ただ，カチン人の例に見られるように，「多数民族」が実権を握っている国家に抵抗する「少数民族」の内部でも，政治の力学がはたらき，多数派と少数派が形成され，葛藤が起きたりす

る現実もある。

カチンの場合，独立・自治権運動に積極的な「言語集団」が運動の中核となって，民族の団結を強調するあまり，独立・自治権運動に消極的な他の「言語集団」の反発を呼んでしまった。独立・自治権運動は，それに積極的な「言語集団」の人びとのカチン民族意識を高めたが，一方で，それに消極的な「言語集団」の人びとの脱カチン民族意識の動きを導き出したともいえる。それは，自分たちはカチンではなく，ラワンなのだという独自の民族意識形成の動きさえ生み出すことにもつながった。

民族は他の民族との関係や国家との関係のなかで，変動する政治・社会状況に対応することを避けられない。たとえば近代国家に組みこまれ，「少数民族」として位置づけられ，「多数民族」中心の国家の権力が生活の場におよんでくれば，何らかの対応を迫られる。国家が武力をもって踏みこんできて，それに同じ武力で抵抗する道を選んだ場合，その抵抗を実効あるものとするためには，政府や軍隊に相対することのできる政治組織と軍事組織をつくらざるをえないのが現実である。

そして，その組織は皮肉なことに，自らの勢力がおよぶ地域において，否応なくひとつの政治権力・制度としても機能してしまう。それは規模や程度の差はあれ，国家機関が持つ行政・軍事面での機能と相通ずるものがある。政治・行政・軍事の機構が一種のモデルとして，先にそれを備えた政府側から反政府側に影響をおよぼすようにして伝わるのだろうか。それは，リーチが『高地ビルマの政治体系』のなかで語っているように，カチン社会の首長制はシャン社会の土侯制からの影響によって生み出されたことを連想させる。

それにしても，ビルマやタイや中国などの山地や高原で，自然のリズムに添ってその恵みを受けて暮らしてきた人びとにとって，民族意識や国民意識は自明のことではないだろう。しかし，近代国家との関わりが避けられない現実がある以上，民族意識や国民意識をめぐる問題と無縁ではいられない。

願わくは，かれらがその問題に向かい合うとき，人間をふくむあらゆる生命の共通の土台としての自然の方が，国家や民族よりも歴史は古い，ということにたえず思いいたって，その原点に立ち返りながら考えていってほしい。そのことを，かれらは自然のリズムに添った暮らしとアニミズムの宇宙観などを通じて体得しているはずだから。

いま，忘れえぬ光景が心のなかに浮かんでくる。

1987年5月26日，乾季末の炎暑が山を野を焦がす頃，中国との国境地帯の山地にあるカチン独立軍の総司令部が，ビルマ政府軍の猛攻を受けて陥落した。そのため，わたしはカチン独立軍のゲリラ部隊とともに尾根道をたどって，まだ攻撃されていないカチン独立機構の総司令部パジャオに向かった。

その夜，パジャオの手前にあるリスー・パジャオ村の民家に泊めてもらった。土壁造りの家

の土間では，青と赤と黒の民族衣装を着たリスー人の老婆が，夜遅くまで黙々と，干しトウモロコシの固い粒を手でしごき取って，竹かごに入れる仕事をしていた。

老婆は，政府軍がもうじきパジャオに迫ってくるという緊迫した事態を知らないのだろうか。そのさりげない手つきは，昨日までと同じように明日も明後日もトウモロコシを食べるために，あたりまえの作業をくりかえしているにすぎない，と語っているみたいだ。しかし，2，3日後には，村人たちは戦火を逃れて中国領に難民として越境せざるをえないだろう。それなのに，老婆は淡々とトウモロコシの粒をしごいている。

いや，ひょっとしたら彼女は危機を察して，できるだけ多くのトウモロコシの粒を取っておこうとしているのかもしれない。

村人は焼畑でトウモロコシをたくさんつくり，日干しにしてたくわえ，石臼で細かく挽いては米とまぜて炊いたり，豚や騾馬の餌にしたりする。だから，仮に難民になっても，トウモロコシの粒を持ってさえいれば，当座の食糧になる。また，もし村に帰れず，種まきを終えたばかりの焼畑を放棄せざるをえなくなった場合，どこか逃れた先で種としてまくこともできる。

トウモロコシは毎年毎年，雨季と乾季の自然の周期にしたがって，種から実をつけ，人に食べられた残りの粒がまた種になり，という植物としての生命の連なり・流れをつないできた。人もまたトウモロコシを食することで，生命の連なり・流れをつないできた。トウモロコシは山住みの民の移動と定着の歴史に寄りそってきたともいえる。

老婆が一心に粒を取る光景は，村人とトウモロコシの，人間と農作物の結びつきの根にふれるものを感じさせた。老婆とトウモロコシの一粒一粒は，元は根を同じくし，生と死の場を，時を共にしているかのように思えた。たとえ軍隊が，国家の力がおおいかぶさってこようとも，その根は断ち切られないはずだ。老婆はそのことを本能的に知っているのではなかろうか。

そして，このとき老婆は，国家や民族や氏族といった人間の頭が考えだした枠組み以前の人として，さらには名前という固有名詞以前の人，生命として，そこにいたのかもしれない。

民族問題と多民族共存の場への道筋を考えるとき，異なる民族同士であっても互いに元をたどれば，国家や民族などの枠組み以前の生命として，まずこの世にあらわれたのだということに，思いを馳せるのも意味のあることだと思う。

あの山間の夜ふけ，老婆は，息子が「もう休んだらどうか」といたわるような声をかけるまで，トウモロコシの粒を取る手を動かしていた。

それから二日後，村人たちは住み慣れた家を後にして，中国側へ国境の山を越えていったと聞く……。

国名について

1989年，国名が「ミャンマー連邦」に変えられた。「ミャンマー」とはビルマ民族名のビル

マ語文語読みで，従来は口語読みの「バマー」が使われていた。軍事政権は「ミャンマー」にビルマ人以外の諸民族を同化する政治的意図もこめている。実際，民族名や州名や地名もビルマ語文語読みに変えられつつある。また，国民の総意に基づく変更ではなく，民主的な手続きも経ていない。これらの理由から，「ミャンマー」という国名は，民主化をのぞむ国民に受け入れられたとは考えられず，軍事政権に反対する人びとは使っていない。各国のビルマ研究者やジャーナリストの間でも，「ミャンマー」と表現しないことが多い。以上の理由から，本稿でも「ミャンマー」ではなく従来の「ビルマ」を国名として使うことにする。地名や州名なども取材当時のままとした。

諸民族の人口について

多くの国々で「少数民族」の人口は少なく見なされがちであり，過少な数字が統計上にあらわれたりする。国家の統計や推計による数とその民族自身が主張する数に，隔たりのある例がよく見られる。たいてい後者の主張する数の方が多い。ビルマなどでは，内戦のために全国的な人口調査もおこなわれていない。したがって，「少数民族」と見なされる人びとの人口を把握するのは難しいが，参考までに文献からの数字をあげておく。

1．タイの山地民の人口は，『世界民族問題事典』[梅棹 1995:678-679，古家晴美による項目「チャオ・カオ」にある，タイ山地民研究所資料] によると1992年には約57万人である。

2．ヤオ人の人口は，『世界民族問題事典』[同上書:1163，吉野晃による項目「ヤオ人」] によれば，中国に213万7千人あまり（1990年），ベトナム北部に約29万4千人（1987年？），ラオスに推定1万3千人（1975年），タイ北部に約3万6千人（1988年）である。

3．ラフー人は，中国雲南省に1982年の統計で約30万人（『文化人類学事典』[石川他 1987:812，栗原悟による項目「ラフ族」による]），ビルマに1983年当時で約15万人（Peoples of the Golden Triangle [Lewis and Lewis 1984:172]），1992年の統計でタイに約5万7千人（『世界民族問題事典』[梅棹 1995:679]），ラオスに1983年当時で約1万人（Peoples of the Golden Triangle [Lewis and Lewis 1984:172]）。

4．カチン人はビルマに1963年の推計で約75万人（『民族と言語』[薮 1994:82]），中国に1992年の統計で12万人近く（『世界民族問題事典』[梅棹 1995:743，長谷川清による項目「チンポー人」]），インドに数万人（？）を数えるという。

参考文献

龚庆进．1988．『景頗族』民族出版社．
石川栄吉；梅棹忠夫；大林太良；蒲生正男；佐々木高明；祖父江孝男（編）．1987．『文化人類学事典』弘文堂．
岩田慶治．1971．『東南アジアの少数民族』日本放送出版協会．

小松光一．1997.「天に一番近くに住む山の人々」『自然と文化』53．日本ナショナルトラスト．
リーチ，エドマンド．1987.『高地ビルマの政治体系』関本照夫（訳）．弘文堂．
Lewis, Paul; and Lewis, Elaine. 1984. *Peoples of the Golden Triangle*. London: Thames and Hudson.
島尾敏雄（編）．1977.『ヤポネシア序説』創樹社．
梅棹忠夫（監修）・松原正毅；ＮＩＲＡ（編）．1995.『世界民族問題事典』平凡社．
薮　司郎．1994.「民族と言語」『もっと知りたいミャンマー』綾部恒雄；石井米雄（編），73-110ページ所収．弘文堂．
矢野　暢（編）．1977.『東南アジア学への招待』日本放送出版協会．
吉田敏浩．1995.『森の回廊』日本放送出版協会．